

“まち観帖”を開けたひとへ

まち歩き

NHKの番組“ブラタモリ”にみるように、まち歩きがアツい。まち歩きに魅せられる理由は何だろう？ いろんなまちが醸し出すそれぞれ独特の雰囲気味わい、比較するのは面白い。まちの境界ってあるような気がする。そのまちの雰囲気がそこから先は急になくなっちゃうような“際”を見出せると、ひとり悦に入るかもしれない。隣のまちとの繋ぎ目なんてあるのだろうか？ そんな問いも芽生える。

境界や繋ぎ目をつくり出すものは“コミュニティ感”だろうか。人がそのまちに住まい、人と人がコミュニティを形成しているからこそ、住まい方やコミュニティ意識が“まちの見え”の何かに現れる。それが境界、繋ぎ目、コミュニティ感を生む。道路や川や土地の起伏や造成の区割りなど、まちの物理的な要因が人のコミュニティ意識に大きな影響を与えることも確かだ。

我々（諏訪&加藤）もまち歩きに魅せられた人種だ。月に一度、ふたりとも授業がない日を選んで、一回に3時間程度、東京のまちを歩いた。炎天下で流れる汗を拭いながら彷徨うこともあれば、極寒に凍えながら頑張ったけれど、さすがに2時間で音をあげ、蕎麦屋に駆け込んで夕方前に気付けの一杯を傾けたこともあった。歩き始めてかれこれ一年が経つ。

まち観の型ことば

結論から言えば、まちを“観る”我々の眼はこの一年で凄まじい進化を遂げた。“観見の眼”という言葉で“見る”と“観る”を区別した宮本武蔵流に言えば、我々はもはやまちを「観」ている。表面的に見えることを越えて、些細で微妙な特徴や状況をも観て、人の住まい方やコミュニティ感を想うことができる。まちの過去に想いを馳せ、今昔の視点でまちを観る習慣も身に付いた。

そこで、我々が体得したまちの観方（みかた）をひとつひとつ、
「まちで観察できるものや物理的状況」

×

「そのときどう感じ、想い、行動すると面白いかな」

という型として抽出し、各々の型をはがきサイズのカードに綴った（“まち観の型ことば”と呼ぶ）。そういうものごとに遭遇したときに、我々はそういう感じ方、想い方、行動の仕方を試みてきたという記録でもあり、まち歩き体験を豊

かにする我々なりの方略でもある。型ことばは49枚できあがった。

一年前は、単に、まちの境界をみつけれたら面白いねという問題意識だけで歩き始めた。ある日武蔵小山で、区の道路開発と拮抗して建つ散髪屋をみつけたとき、我々の転機が訪れた。そこは加藤が昔住んでいた近くで、「このあたりの道、昔はこんな風じゃなかったんですよ」と言い出したことがきっかけで、iPhoneアプリの古地図を見たことから事は展開し始めた（“まち観帖”の第三分冊“まち観がたり”を参照）。古地図で昔の品川用水をみつけたのだ。品川用水は玉川上水から分水され、世田谷区、品川区、太田区などを流れ、近隣住民の生活用水を担う源だった。いまは完全に埋められて下水道として機能し、ほとんどの場所で道路になっている。我々がまちのコミュニティ感を考えるようになったのは、水路が走るまちのコミュニティはどう延び、どう広がっていたのだろうかという問題意識を持ったからである。まちの境界は滑らかな線で描かれるなんて単純なものではないのだ。

こうして生まれた我々の“まち観の型ことば”は6つのカテゴリーに大別された。

1. 今昔の視点でまちをみる
2. 地図はこう観る
3. かつての水路を感じる
4. 五感でまちを捉える
5. コミュニティの繋がり／広がりを感じる
6. コミュニティのキャパシティを感じる

である。

パターンランゲージに対する問題意識

パターンランゲージという概念がある。建築家のアレグザンダーが、家の間取り、敷地内のレイアウト、コミュニティのつくりかた、都市計画に至る様々なレベルで、彼がよしとするデザイン手法を一定形式に書き下したパターン集である。その後、ソフトウェア開発、学習手法の開発など複数の分野に応用されてきた汎用性の高い概念である。パターンランゲージの有効性は認めつつも、我々はある疑問も抱いてきた。ひとつひとつのパターンを“ことば”として使いこなす方法論が提示されていないのではないかと。ユーザーはこのランゲージの使い方を見出せず路頭に迷うことが多いかもしれない。

まち観帖

“まち観の型ことば”も一種のパタンランゲージである。そこで我々は、まちを歩く動機を自然に抱かせ、“まち観の型ことば”を駆使して独自の体験を豊かにできるようなキットとして“まち観帖”を制作した。“まち観帖”は

1. 第一分冊：まち観房具
2. 第二分冊：まち観の型ことば
3. 第三分冊：まち観がたり

からなる。

第二分冊の各々の型ことばは、我々が歩いてみつけたリアルスポットに裏打ちされている。例としての各スポットを地図上に記したところ、多くの型ことばが集中するエリアが数カ所みつかった。そのエリアを歩くと様々な感じ方／想い／行動が喚起されることを意味する。つまり、そこは何らかの物語性が感じられるようなエリアなのだ。我々はそういうエリアを4つ選び、それぞれのエリアから連想される架空のお話を創作してみた。それが第三分冊“まち観がたり”である。ひとつのお話には、該当する“まち観の型ことば”が複数個散りばめられている。

まち観帖の使い方

結論からいえば、まち観帖は「他者のまち観がたりから入って、型ことばに興味を抱き、しだいに自分の型ことばとまち観がたりを手に入れる」という感性学習方法論である。

“まち観帖”のユーザーには、まず“まち観がたり”のお話を読んで欲しい。そして、それぞれの話に“まち観の型ことば”がどのように散りばめられているかをみてほしい（“まち観がたり”は、お話をプレーンで読ませる章と、“まち観の型ことば”へのポインターを張った章の2部構成になっている）。興味をそそられる“型ことば”が見つかるかもしれない。型ことばには関連する他の型ことばとのあいだで相互参照の関係が明記してある。

もし幾つかの型ことばに興味を抱いたら、そのカードを携えてまちに繰り出そう。そのときに第一分冊の“まち観房具”が役に立つ。地図とカード数枚をうまく束ねて持ち歩く房具であり、手引書に準備方法は書かれている。

まずは、それぞれの“まち観の型ことば”に合致するスポットを見つけることを目指そう。型ことばには我々がみつけたリアルスポットの緯度経度情報も

載っている。そこを訪れて確認するもよし、自分で新たな合致スポットをみつけるもよし。合致するスポットをみつけたら地図にカード番号を記し、緯度経度も調べてカードに記入しよう。まずは我々が開発したまち観方略の視点でまちを歩き、まちを感じることから始めるわけである。“まち観の型ことば”の視点で様々なスポットを体験することによって、パッと見ただけでは見落としてしまう状況や痕跡に敏感になること請け合いだ。

そうこうするうちに、まちに自分オリジナルの“型ことば”をみつけ始めたらもうしめたもの。それをカードにして“まち観の型ことば”に追加しよう。そして多くの型ことばが集中するエリアをみつけ、そのまちを語る物語（あなたのまち観がたり）を書こう。でも、もし、自分オリジナルの型ことばをいきなりみつけるのが難しい場合は、まずは我々の型ことばをつかって、自分なりにまちを語ってみるのがよい。そして2週目のサイクルに入れば、今度は自分オリジナルの型ことばをみつけ、まち観がたりをつくれるはずだ。そこまで辿り着けばあなたもまち観エキスパートだ。あなたの物語はまた別の誰かを駆り立て、まち歩きの輪が広がる。

慶應義塾大学環境情報学部
諏訪正樹
加藤文俊